

ドレッサージュホースに育てよう!

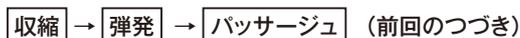
🐾 ピアッフェ・パッサージュ Part 3

7月は全日本馬場馬術大会パートIIの内国産選手権（セントジョージクラス）に参加してきました。跛行を繰り返していたオースミレブンのコンディションをなんとか整え、無事に2日間の競技を5位入賞で終えることができました。内容は思い描いていたものとは程遠く、課題ばかりが残るものとなりました。

2014年11月に調教を開始し、これまでLクラス、Mクラス、Sクラスとステップアップし、今年に入りFEI セントジョージクラスに挑戦してきました。どのクラスの時にも課題があり、常に考えさせられる日々を積み重ねてきました。調教だけでなく、馬の身体的問題にも悩まされていますが、それでも内国産選手権に出場できるステージまで来られたことは感慨深いです。

しかし、今後もベーシックなトレーニングを継続的に行い、ベースの動きをより安定させなければなりません。その上で初めて高度な運動が実施できるということを改めて認識し、今回のテーマであるパッサージュの調教を進めていきたいと思います。

前回は、半減却から透過性を保つ方法について考えました。今回は、前回のつづきで収縮から弾発を生み出しパッサージュへ向かう方法について考えてみます。



前回まとめた半減却と透過性の関係を確立させながら、パッサージュにトライしていきます。そもそもパッサージュは前進氣勢を馬体に溜める運動です。そのため、前に行こうとする馬の力をある程度抑えます。その具体的扶助は、手綱扶助と騎座扶助が中心となります。そして、前進氣勢を生み出す元となる、後軀を活発にさせる脚扶助も使います。

ここで脚扶助の話をする、昔から日本の馬術は、「脚を使えば使うほど馬は動く」「脚を強く使う」「常に脚を使う」などの考え方があり、運動がうまくいかないときは、全て脚が足りないと言指導する傾向があります。人馬間の調和が乱れるのは、推進（脚扶助）とそれを受けるコンタクトのバランスが崩れていることが原因です。それを脚扶助だけを要求したとしても調和は図れません。もちろん脚扶助は絶対的に必要です。しかし、馬が十分に前進しているにもかかわらず、さらに「脚が足りない!」と怒鳴り指導します。騎乗者は混乱しながらただ無意味に脚を使い、馬はリズムも狂わされてうんざりするはず。私は、「できるだけ脚を使わない」馬との関係を常に目指しています。もちろんそれらの過程で、馬にとってはショックなほど脚扶助を使うこともあります。しかし、それも全て「最小の脚扶助」への過程でしかありません。最終的には、このパッサージュやピアッフェの運動も、脚や拍車などが馬のお腹の皮膚にすら触れずに生み出すことができるようにしていきます。それが「ドレッサージュ」です。

話を元に戻すと、パッサージュへの扶助の始まりは前進です。そして半減却と透過性を作り出しながら、前進しようとする動力を手綱扶助によって抑えます。それはブレーキではなく、力を溜める合図です。そのため、使い方は以下のことをイメージします。

手綱操作の注意点

- ① 手綱扶助と騎座を連結して使います。
- ② 手綱を一時的に引きますが、必ず譲り返し、ハミへのプレッシャーを解放します。
- ③ そうして再び「控えて溜める」→「譲って返す」→「騎座で馬の体勢を維持」→「控えて溜める」→「譲って返す」→「騎座で……」というサイクルを行います。

手綱操作は単独使用もちろんありますが、常に騎座との結び付きがあります。手綱を使う時は騎座と連結、拳を譲る時は騎座を安定、と意識します。

手綱扶助と騎座の組み合わせ扶助を使うタイミング

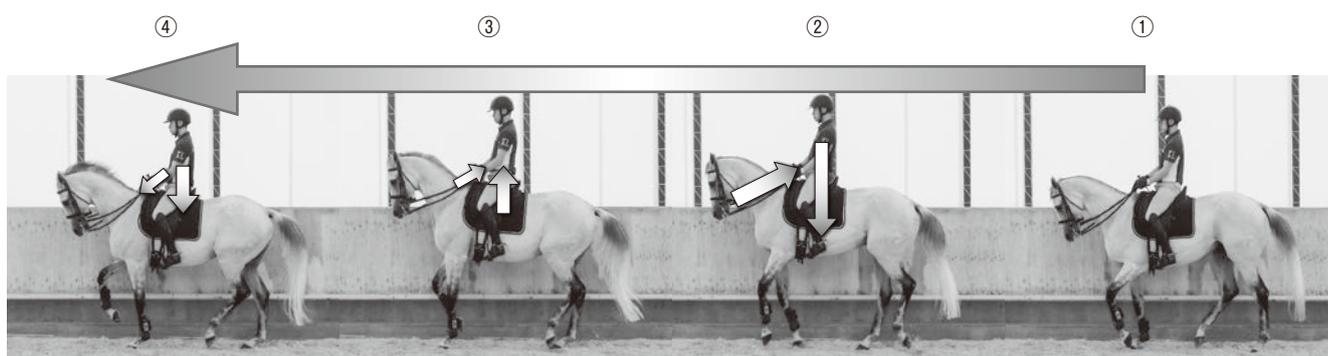
速歩のリズムは2拍子です。タイミングと言ってもあまり難しい瞬間までを特定すると物事がどんどん複雑になっていってしまいます。単純に考えるために定義すると、

I. 馬が地上で関節を曲げて力を溜める期間（地上期）

II. 馬が関節を伸ばし空中に舞っている期間（空間期）

と大きく2つに分けます。

騎手が馬にパワーを溜めさせるために、手綱を控えながら騎座と連結させて扶助を強めるタイミングは、II. の空間期のピークが終わり、地上に舞い降り始めるところから始まります。



- ① 右後肢が踏み込み、左前肢が上がる地上期を示しています。ここがこれから始まる空間期へのスタートになります。ここから前進氣勢を馬体に溜めるために、コンタクトを控えながら、馬のバランスを起こすように騎座を深くして強く座ります。推進が足りなければこの瞬間に両脚を使って促します。馬にパワーが十分に溜まっていれば脚は全く使わず、馬の腹にすら触れる必要はありません。
- ② 空間期に入ろうとしている瞬間で、騎座を安定させ座りますが、強く座ることだけが良いことではありません。背中が敏感な馬は、強い騎座により緊張度が増し過ぎる場合もあるので、その場合は、鐙を強く踏み柔らかくシートします。騎座（鐙）と拳を強く関連させて馬の体勢を整えます。これにより、空間期に入る準備（パワーの蓄積）が整います。
- ③ この写真は弾発が不足して馬体が浮き上がっていませんが、ここが空間期です。手綱を引っ張り上げるのではなく、馬と一緒に宙に舞う感覚で手綱を控えます。この前に十分に騎座と手綱を控えて馬を引き付けているため、ここでは馬と同調するようなイメージで馬と上に向かって舞います。
- ④ 地上に降り立つ瞬間、馬は関節をよく曲げサスペンションを利かせて衝撃を吸収します。手綱を引いてハミにプレッシャーを掛けて馬の動きを苦しくさせないように、騎座も馬と同調するように優しく（鐙にも体重を掛けてよい）して降り立ちます。しかし、着地した瞬間にはもうパワーを溜めるために①の動作へ戻ります。

これらのように、手綱扶助と騎座扶助を組み合わせながら収縮を作り、それが結果として弾発を生みます。これまで詳しく感覚的なことを書きましたが、実際はとてもシンプルです。脚（推進）→拳（減却）・騎座（推進・減却・透過性）しかありません。そして我々は、馬の動きを邪魔せず調和するために、上半身は真っすぐにしつづけることがないようにします。下半身は、つま先を進行方向に向け、膝と太ももをしっかり鞍に密着させて、騎座全体を安定させて上半身を支えて馬を快適にします。馬にパッセージュをさせようと常に脚を使って追い込むのではなく、パッセージュになる環境を作って待つということが大事です。リズムは馬が作ります。我々はそのきっかけと合図を出して馬と常に調和し、馬が収縮と透過性を整えられる環境を作る役割だけを担っています。

今回は、収縮の最終形“ピアップフェ”について考えたいと思います。

